

<開催日時>平成27年10月17日(土) 16:00~18:00

<開催場所>槻の木高校応接室

<出席者>

[委員] 木村 勝 会長、柿原勝彦 委員、北山茂治 委員、芝井敬司 委員、  
浅野良一 委員 宮坂政宏 委員

[学校] 竹下健治 校長、奥谷彰男 教頭、小梶芳忠 事務長  
山本 尚 首席、田中 眞 首席、藤田 稔 教諭

## 1. 校長挨拶(竹下校長)

感動的な文化祭であった。なぜか知らないが涙が出てくるような経験をさせてあげたい。課題は授業の質の向上。入試が後期に一本化になり学校間格差が大きくなるであろうが、槻の木高校としてはしっかりとした骨太の方針を決めて生きたい。

## 2. 会長挨拶

会社の若い子や子供を見ていてインターネットが普及し、情報が多すぎて何が正しいか分からない。槻の木は人として大切な基本をやっている学校であり、将来の真のリーダーが出てくれれば嬉しい。

<話題提供1 平成27年度 活動中間報告(山本首席)>

(別紙)をもとに<Ⅰ>の説明(山本首席)

竹下校長

アドミッションポリシーの中にリーダーシップを入れたかったが、簡単には言わない。簡単には言わずにもっと高いレベルにいたるまでは敢えて言わない。骨を大切にしながらまだまだやるぞという思い。

山本首席

学校説明会でもやっていることを伝えるようにしている。今からやりたいことなど目標をさもやっているという言い方はしない。スピリッツを伝えられれば良い。

(別紙)をもとに<Ⅱ>の説明(山本首席)

奥谷教頭

授業力とは関係ないかもしれないが、本校の若い先生方は職員室のごみを片付けてから帰る先生がいらっしゃる。

(別紙)をもとに<Ⅲ>の説明(山本首席)

奥谷教頭

壁新聞とともに電子掲示板でも様々な情報を生徒に伝えている。

〈意見交換〉

芝井委員

校長先生がラグビーをしていたということは生徒に伝わっているのか？

竹下校長

前回の始業式で少しその話題に触れた。

芝井委員

そういう話が生徒の心に残る。「質実剛健」などの4文字熟語は生徒の心に残らない。後で「本校の校長があんな話をしてくれた」と心に残るような話をさせていただいていたら校長の像が残る。生徒に愛される校長に。個人の大人が生徒に対するときには大切なものはモデルであり、経験などを生徒の心に届かせる力が必要である。

若い先生がテクニクに走るの、マニュアル化世代からなのか？物事にはマニュアルがあり、上手くいかないのはマニュアルが示されていないからという気がする。現場で悪戦苦闘した経験が大切なはずなのに、小さいうちからそのように育てられているから、そのような発想になるのでは？基本的な考え方を変えていけるように非公式な場で指導することも必要。

教育は『正統的周辺参加』と言われるようにシステムやマニュアルではなく師匠と弟子のような関係が出来ないと本当の指導は出来ない。

小さな工夫が大切であり、個人が努力をすれば、進路実現が可能であるといった、思いをあわせていくような『受験は団体戦』と言うものは本当に大切である。熱くなるような仕掛けが大切。それとなく熱い仕掛けを大切にされているのを感じる。

浅野委員

他府県を含め小中学校に比べて高校は ①授業の展開が構造的でない ②新しい手法に保守的（伝統芸能化） ③下手な先生が多い と言う特徴がある。

教員はレベルの高い専門店街であればと思うが、最低ラインを学びの均一化を上げるとするなら ①個人の研鑽に任せるだけでなく揺さぶること ②新しい手法を勉強させる ③仕組みやシステムを授業向上に組み込んでいく。（若手が実力テストを作成し、ベテランがチェックするような）授業の持ち方を縦にするなど学ばなければ仕方がないようなものにする ④風通しの良い職場、授業の会話が出来る雰囲気づくり

山本首席

本校は教員が育ちにくい学校である。生徒の授業態度が良いため教師が気づきにくいかもしれない。

藤田教諭

生徒の態度が良いので若手は勘違いする部分がある。教師が自分に厳しい目を持って臨まないと自分の足りないところに気づかない。

木村会長

授業の上手い下手は先生同士で分かりますか？

竹下校長

分かるが生徒の反応は下手な授業にも上手な授業に対しても反応が薄く、差がない。

木村会長

ベテランの先生の授業を若手が見る機会はあるのか？会社では作業の段取りをビデオに撮ってサーバーで映像をいつでも見られるようにしている。若手は答えを見たら出来ると思っている。課程が大切であるにもかかわらずすぐに答えを聞いてくる。そういう仕組みを作って欲しい。上意下達でやると分からなくても頷くだけになる。いつでもこっそりと学べるようにライブでサーバーから見られるようにすると、マネをする子が出てくる。その子のペースでやれる仕組みを作ってもらえたら良い。うちの会社でやった結果風通しが良くなり、そのことで自信をつけ会議などでも発言が増えた。

浅野委員

昔は技を盗めと言ったが、今は盗み方を教えることも必要ではないか。

木村会長

「教えてください」はハードルが高いのでこっそり見られるような仕組みも必要だと思うが。

宮坂委員

学校として学力向上のミッションと言う視点に立てば、言いにくいという文化を取り除かなければ。

柿原委員

その壁を取ってあげないと育たない。

北川委員

本校では、生徒の学力向上と教師の授業力向上を目的に、水曜日の6限目に1クラスだけ残し、研究授業を行っている。全教員で参加するというのを、年間9教科で実施している。うち3回を小中合同で行っており、先生の授業力と、今年度は特に、生徒が授業の中でどのように学んでいるか、どのような学びがあったのかを中心に協議研究を行っている。

宮坂委員

小中は授業研究をよく行っている。よい事例を共有化することはもちろん教員同士がお互いに課題を見つけると言う学校の位置づけであればベテランも言いやすいのではないか？

浅野委員

高校でも福井県の若狭高校が良い授業研究を行っている。11月に実施する授業研究に学ぶのも良い。

浅野委員

授業評価は各先生に伝えるのか？

竹下校長

一番に伝える。本校では同学年の同教科では進度をあわせているので若手は苦しい。そういう立場の先生を早く育成していかなければと言うのが本校の実情である。

浅野委員

教科によって差はあるのか？

藤田教諭

ある。

宮坂委員

同じ進度が求められるのは当然だろうが、ベテランと同等の進度、成果が求められれば経験の浅い先生は大変だと思う。

藤田教諭

授業においては教材研究がすべてと言えるが、忙しいので時間が足りない人もいる。

宮坂委員

教員数が少ないので難しいかもしれないが、若手に授業・教材研究、生徒理解の時間をもっと割いてやる、とか、ベテランと若手で差をつけるというのは無理か？

竹下校長

3年の進路に係る授業では誰が担当するかということは行っている。ただそこが本校の強みである。

芝井委員

私学として進路に係る授業をしっかりと出来ないのは自殺行為である。放っておいていいことではない。ペアリングをしてベテランから若手にレクチャーするなどの方法は？極端なことは出来ないが工夫が必要だ。力がないではなく力のあるプロの先生になっていただく必要がある。

宮坂委員

教員と言うのは専門職なので、一生専門性を構築・向上していく職だ。若いうちは専門性の構築がしっかりされるよう土台を作る時期である。

会議で意見を言わないという先生がいるということであるが… 前任の仕事で記者をやっていたが、記事は自分の問題意識で取材源に当たって欠くもの、記者会見を聞いて書くものがある。後者は読者の立場に立てば会見者の話をうのみにせず、会見までに疑問点を調べ会見にその点が出なければ質問をする。この質問は他社の記者にも問題意識を共有していただきそれぞれの読者に発信してもらおうという意味合いもある。これは会議にも置き換えることが出来る。テーマ・目標のない会議はありえない。会議にいたるまでに、テーマに基づいて意見質問を持って臨むように指導する必要ではないか。学校のこと、生徒のことを考えれば自分の問題意識を共有するのは当然のことではないか。

また、時間割に関する提案はその通りだと思う。月曜日に2時間連続の授業をして1週間あいてしまうのであれば忘れてしまう。これは1週間の配置もそうだが、1日の配置も同じことが言える。昼過ぎに論理的なことをしても眠くなって頭に入りにくい。ある特別支援学校では体も頭も目覚めていない朝に、歌を歌ったり体を動かしたりする。そのような考えで時間割を作成している。1日の中でも生活リズム、脳の活動リズムに合わせて教科の配置を工夫すれば、効果が上がるのではないか。

浅野委員

教科の壁、学年の壁はありますか？

藤田教諭

学年間にはあまりないが、教科の壁はあるように思う。

浅野委員

壁があって切磋琢磨できればいいが…

山本首席

他教科性のことは十分に理解できていない部分があり、外から見ての意見は言いにくい部分はある。

藤田教諭

フランクな仲であれば言えるが、教科対教科では言えない部分がある。

木村会長

教科会はないのか？

竹下校長

今も年間スケジュールに計画し実施しているが、さらに充実させるため来年からは各試験終了後にも成績会議とは別に教科会の設定を計画している。

浅野委員

英数国は何人くらいの先生がいていいるのですか？

山本首席

10数名で若手とベテランが半々といった構成である。

芝井委員

教科会に校長が参加することもよいのではないか。他教科の先生は難しいが校長はできる立場にあり会議の活性化のためにも必要だと思う。

山本首席

会議の雰囲気を見てもらいたいと言うのはある。会議にも個性があるので、見てもらうのは良いことだと思う。

木村会長

ニコニコ笑って何も言わないのが条件であるが、不定期でも行くのは良い。先生の中には議論の中身を校長先生に聞いてもらいたいと思っている人がいるはずだ。

柿原委員

会社でもたまに行き黙って座っていると弱っている子がよく見えるので、背中を押してやることを心がけている。会議で話さない先生が多いというのも話したい先生がいるはず。校長が出席することで発言が増えるのでは。

浅野委員

授業見学は？

竹下校長

来週から始まる。終わった教員には声をかけるようにする。会議においても風通しの良い学校にしたいので私が出るよりはみんなの意見を聞いていきたい。特に授業についての意見交換をしてもらいたい。

宮坂委員

意見が出にくいのなら会議の持ち方としてワークショップ方式とか意見が出やすい工夫は色々あるが、そのような方法の活用も検討してみてはどうか？

山本首席

意見が出し合える会議であれば特に必要はないと思っている。主催する主任や部長がレジュメを作り司会と記録は自分で行うか輪番で回すかは組織によって違う。あくまでも会議で意見を言うべきであり、決まったことは一緒にやらなければならないと考えている。

竹下校長

本校は室課制度であり、上からと下からという制度をとっている。上の決める企画委員会はしっかりと議論しているが、下からの意見が上がってくる工夫が必要だと感じている。

木村会長

先生には技術やテクニックではなく情熱が大切。情熱の差というのは埋まらない。そういうのが教育であり、一番大切だと思うが、そこが欠けている教員はいないか？

山本首席

成功や失敗の体験の繰り返し人が（教師）を育てると思うが、経験の浅い若い先生方には良い部分を見つけてベテランが積極的に褒めるようにして育てていきたい。

芝井委員

一般的には現在は府の教員にはなりにくい。情熱は持っているが発揮の仕方が分からないのか？また情熱を持っていたとしても、ずっと続くかといえばそうでもない。「何のためにこの仕事をしているのか」と考える時間が必要。単純に安定だけを求めて教員を志望している人はいないと思う。また「でもしか」で教員にはなれない。しんどい職でもある。

木村会長

若い方は感動した体験が足りないと感じている。会社では朝礼でベテランに失敗談を話してもらっている。そのことによって親近感を感じてもらえる。

<まとめ>

浅野委員

授業アンケートの結果を楽しみにしている。授業力向上に向けて個に頼るのではなく仕組みや風土など全般的なアプローチの方法を考えてもらいたい。またこの学校協議会で議論していきたい。

北山委員

中学校3年は進路選択の時期になってきた。槻の木を希望する生徒は「学びたい」「スポーツも頑張りたい」「生活面もしっかりしたい」という生徒が望んでいる。槻の木に入って頑張れる生徒たちの進路指導を行っていきたい。柿原委員

授業の話が教員間で出しやすい雰囲気を作っていってほしい。

木村会長

常日頃から忙しく時間が限られているので、仕組みややり方を変えるなど、根本的に変えていけるところを考えていただけたらと思う。

芝井委員

自分の考えをきちんと相手に伝える力がとても大切であり、槻の木はさらにそこを目

指して欲しい。

宮坂委員

「探求力・実践力・増進力」と校門にあった。先生もそうだと思う。教師自身が探究力を持ち実践していくことが大切だと感じている。もう一つ、授業作品を見せるという報告があったが、これは生徒が価値を持った存在であるということを「見える化」している。大切なことだと思うので今後もどんどんやっていってほしい。